

●はじめに

ポンペイでは、ニッチを洞窟に見立て、多色モザイクやガラス、貝殻、軽石などで装飾されたアエディクラ（小神殿）型およびアーチ型の 12 基の噴水が発見されている。ニンフに捧げられた祠「ニュンフェウム」として知られるそれらの噴水は、一般に、地震（62 年）の起きた前後の時期からヴェスヴィオ山の噴火（79 年）によって都市が埋没するまでの間に流行したものであると考えられている。ニュンフェウムが洞窟建築のヴァリエーションの中の 1 つであることから、ポンペイのモザイクの噴水は洞窟建築と見なすことができる。しかし、この建築は、未だに定まった枠の中で捉えられず、偏った分野から考察される（主にニュンフェウム及び洞窟建築、壁モザイク、庭園考古学の研究の中で扱われるが、包括的に捉えられることは少ない）上に、庭園の装飾要素以上の価値が付与されることはない。それに加え、発見されている数が少なく、その地域もヴェスヴィオ山周辺に限定されるため、この建築に関する体系的な研究は十分に為されていないのが現状である。

モザイクの噴水について、「庭園の焦点として、住宅の主要な入口の軸上にある壁面に対して設置される」、というように説明が為されることが多い。また、このタイプの噴水は、通常壁面に依存する形態を採るため、完全なペリステリウムを備えた大規模な住宅よりも、それほど規模の大きくない中流階級の住宅で多く見られる。このことから、それは、経済的な理由や空間的な制約により、広い庭園を所有することができないような住宅でも壁面を利用して設置することができ、所有者自慢の「見世物」としての役割を果たした建築であったと考えられている。

しかし、モザイクの噴水の装飾的な外観や、住宅の入り口の軸上（外部から見るができる場所）に位置するという立地条件にのみ頼り、それらを一概に、単に所有者の見栄を示すだけのものとして捉えるべきだろうか。このような噴水には、本当に、住宅の庭園を装飾するだけの役割しか期待されなかったのだろうか。

本論文は、上記の 2 点の疑問に基づき、ポンペイでモザイクの噴水が流行した理由を考察し、そこに、一般的に考えられているものとは異なる新たな価値を付与することを目的としている。まず第 1 章で、ニュンフェウムや洞窟建築について定義することで、ポンペイのモザイクの噴水がどのような建築であるかを明らかにした。次に、第 2 章では、通常このタイプの噴水が置かれている庭園とは、ローマ人にとってどのような領域であったのかについて、住宅との関係やその発展、水道が導入されたことによる変化、役割の点から述べている。最後に、第 3 章では、ポンペイの 12 基の噴水を建築上の特徴に基づいて段階ごとに分類し、噴水周辺の壁面に描かれた装飾や、ポンペイにおけるそれら（洞窟建築）の立地に関する考察を行った。

●本論概要

ポンペイのモザイクの噴水について考察するに当たり、まず、それらが属するとされるニュンフェウムや洞窟建築とはどのようなものであるかについて検討した。ニュンフェウムとは、定義上、洞窟の奥に隠された、神的存在の保護下にある神聖な水源のことを指す。それは多くの場合、「ニンフ（とりわけ水源に関わるニンフ）に捧げられた祠」というように説明され、人の手の加わった水源を指す場合もある。現在、ニュンフェウムの用語的な定義やそのイメージは明らかにされているものの、建築上のプランの点では明確な定義が為されていない。そのため、外観的な「ニュンフェウムとはどのようなものであるか」、ということに関して、一般的に「装飾的な（記念碑的な）噴水」であったり「水源を伴った洞窟建築」というように、かなり曖昧で主観的な解釈がされる傾向にある。しかし、洞窟建築には、その時々が必要とされるイメージに基づいた呼称が多くあり（カウエルナ、クリュプタ、スペルンカ、スペクス、ムゼウム等）、古代の世界においても、必ずしも限定的なイメージを持つものではなかった。それを指す用語の使用が一定ではないように、洞窟建築とは、建築的にも一定のプランや形式上の決まりを持つものではなく、自由な形で表現することのできる建築であったと思われる。そのような、ギリシアに起源を持ち、共和政期以降のローマにおいて大きな発展を遂げた洞窟建築の中でも、ニュンフェウムは、とりわけ、ローマ固有の洞窟のイメージを持つ建築であったと考えられる。ポンペイに見られるモザイクの噴水やその他の洞窟建築には、それが造られた当時、ニュンフェウムという名称が与えられていなかったかもしれない（1世紀半ばに初めて文献に登場し、碑銘として一般的に使用されるようになったのは2世紀以降のことであるため、地方都市ポンペイで1世紀半ばにその用語が一般化していたとは考えにくい）が、現代的な「ニュンフェウム」という呼称は、ローマの洞窟建築をギリシアのそれとは異なるものとして扱う際に適していると言えるだろう。

古典期のギリシアで異世界の境界として恐れられていた洞窟は、ローマの共和政末期になると庭園を介して住宅に入り込んだ。モザイクの噴水も、ギリシアのそれとは異なり、手の届く、日常生活の範囲内の自然のイメージを反映した洞窟建築として住宅の庭園に建てられたものである。洞窟建築がローマの住宅に介入するようになった共和政末期から帝政初期にかけては、ヘレニズム文化がもたらされ、ローマで生活様式が急激に変化していった時代でもあった。ローマ住宅のあり方には、そういった生活様式の変化が顕著に反映されている。紀元前2世紀のペリステリウムの庭園の導入は、生産的な性格が強かった伝統的なローマの住宅の庭園のあり方を装飾的な性格を持つものへと変化させた。また、ペリステリウムの普及と時期を同じくして水道が普及し、安定した水が得られるようになったことで、庭園の装飾的な性格が助長されていった。

住宅における庭園の本質的な役割は、自然を居住者の身近に位置付けることである。それは、庭園の性格が装飾的なものになってからも、ローマ人にとっては重要なことだった。庭園では、日々の生活に即した様々な活動が行われた。自然の力の宿る庭園は、神聖

な場所であり、ペリステリウムや水道が普及してからは、自然や美術品を同時に鑑賞することのできる場所としても機能した。神聖な空間から発展し、自然と人工が融合した洞窟建築にとって、ローマの庭園は適した環境だったと言えるだろう。また、噴水に使用される、主要な装飾材である軽石・貝殻は単色の自然（ナトゥーラ）を象徴し、多色のモザイクは人工の技・芸術（アルス）を象徴する。そのため、それらを組み合わせたモザイクの噴水には、自然と人工を同時に実現しようとするローマの洞窟建築の概念にとりわけ則した装飾材が使用されていたことが分かる。

ポンペイのモザイクの噴水は、外部から見ることができるか否か、ということに関わらず、通常、一般的に考えられているように庭園の焦点としての役割を果たす。そのため、多くの場合、この装飾性の強い噴水は単なる装飾要素としてしか見なされない。しかし、展示される空間である庭園がそうであるように、ローマ人は、この装飾要素に対しても、単に審美的な役割だけでなく、何らかの実質的な役割も与えていたと考えるべきである。

モザイクの噴水は、洞窟建築として、住宅の一部にありのままの自然（洞窟）を再現すると同時に、人工の建築として所有者の嗜好を反映することができた。さらに、その自由な装飾と華やかな外観から想像することは難しいが、神の住居として神聖な建築でもあった。当然、通常の噴水と同様に、モザイクの噴水も水の音や涼しさを演出する役割を果たすこともできた。しかし、それだけに留まらず、モザイクの噴水は、立体的な絵画として現実の世界と絵の中に描かれている想像の世界を繋ぐ役割も果たした。洞窟とは、本来、異世界との境界の領域に位置付けられるものである。そのため、壁面と接する形で洞窟が設けられることによって、2次元の世界（壁面装飾の世界）と3次元の世界（現実の世界）を近づけることが可能となった。また、噴水の周辺には庭園画が描かれることが多く、とりわけ描かれた噴水が近くに設置される傾向にある。モザイクの噴水の立てる音は、庭園画の中の噴水を見る人に、絵画の中の噴水から実際に水が溢れているように錯覚させることができただろう。

壁面に接する形で置かれるポンペイのモザイクの噴水は、異世界との境界に位置する洞窟建築であると同時に、ポンペイ壁画第Ⅱ様式の時代から壁面の焦点として絵画の中で広く普及していたアエディクラを実体化した建築でもあった。非現実的な空間を再現することを目指す第Ⅳ様式の時代になると、住宅の壁面は、実際の建築要素（既存のニッチや窓、入り口など）と絵画が効果的に組み合わせられるようになり、壁面装飾においては、いかにして本来の建築を絵画中に取り込むか、という問題に重点が置かれるようになっていく。一方で、モザイクの噴水の場合には、壁面から突出している建築をいかにして壁面に溶け込ませるか、ということに重点が置かれていくようになる。また、モザイクの噴水には、壁面に組み込まれていく傾向が見られる。このように、第Ⅳ様式の時代（おそらく、とりわけヴェスヴィオ山噴火の前の数年間）になると、建築と壁面装飾がお互いに接近し始めるようになったことが分かる。

ポンペイのモザイクの噴水 12 基を 4 段階に分類することで、徐々に壁面に組み込まれて

いくことが明らかになり、この建築と壁面とのより密接な関係が証明されている。絵画から飛び出してきたアエディクラが再び壁面に戻り出すということは、一見すると矛盾しているようであるが、この事実は、壁面装飾と実際の建築要素の間に明確な区分が設けられなくなっていったことを示すものとして捉えることができる。

以上のように、壁面の絵画が実体を伴ったポンペイのモザイクの噴水は、庭園画を描くことで実際の空間よりも広く見せることが求められた庭園という場で、効果的な装飾であったと思われる。そのため、このような噴水は、それほど規模の大きくないポンペイの一般住宅において流行したと考えられる。